

# こころとせいの

## 第34号

平成24年 4 月

発行 高知厚生病院  
広報委員会

### ◆ 高知厚生病院の理念・基本方針 ◆

#### 理 念

私たちは、安全かつ質の高い医療を提供し、皆さまに信頼される病院を目指します。

#### 基本方針

1. 患者さまとご家族、更に地域の皆さまの幸せのための医療を実践します。
2. 患者さまの権利を尊重し、真摯かつ温かい態度で接し、心と心が通い合う医療を実践します。
3. 自己研鑽に努め、更に発展向上を目指します。
4. 地域の医療機関や施設と連携し、効率的な医療を目指します。
5. 地球環境に留意し、災害への備えを怠りません。

## ブッダガヤ紀行

(最終回)

副院長 山口 龍彦

連載してきたブッダガヤ紀行も最終回となった。今回は、お釈迦様が修行をされた後をたどって、その風景を紹介しよう。

お釈迦様がその木の下で悟りを開かれたという菩提樹を中心に創建されたのが、前回紹介させていただいた大菩提寺であるが、お釈迦様が然大悟されるまでには、6年間の修業の時代があった。

この6年間のほとんどの期間は、かつての王宮での華やかな生活とは一転して、減食、断食を行ないつつ肉体を痛めつける苦行の生活であった。この時の修行場所が象頭山（ぞうずせん）である。ブッダガヤ周辺では、見渡す限り山と呼べるような山がほとんどない乾いたインドの大平原に、高知市の五台山より低い岩山が突き出ているのがそれである。



象頭山（前正覚山）手前の草原のように見えるところは  
乾期で水のないネーランジャー河の河底

ブッダガヤからネーランジャー河の堤防沿いの道を車に揺られること半時間余、下流の橋を渡って、いくつかの集落を通り過ぎると山の麓の集落にたどり着く。ここで車を降りて山に向かう道に入ろうとすると、20～30人ほどの子供たち（5歳から10歳ぐらいであろうか）に取り囲まれて進めなくなってしまった。

すると、棒を持った60歳ぐらいの男が現れて、子供たちを威嚇し追い払う。私たちが歩くところの男も同行してくれて子供たちを私たちに近づ



けないようにしてくれているようだ。

この写真の女の子もそんな物乞いの一人である。この子はお守りをしながら物乞いもする。インドは常夏の国のように思っていたが、インドの中でも北方に位置するこの地方の冬の気温は高知の11月下旬ぐらいの感じである。服を着ていない子は少ないのだが、彼女は着る服さえ持っていない。この近辺の村々では、小学校自体開校されていないか、建物はあっても教える教員がいないのだそうだ。この子を含め、ほとんどの子供は小学校さえ行くことができない。

しばらくすると、あの棒を持った男が、このビスケットを子供た



前正覚山の洞窟へ向かう道にて



水を運ぶ子供たち

ちに恵んでやれという。なるほど。この男はビスケットを仕入れて観光客や巡礼者に売り、それを子供たちに与えることを仕事にしている人だったのだ。依頼か命令かは分からないけれど、その男の申し出を断るという選択肢はあり得ないようだ。言われるままにビスケットの代金を支払い、子供たちに分け与えてもらうしかない。

巡礼者にまとわりつくほかにも、子供たちに仕事を与えられることもある。写真の少女たちは水の一杯入ったバケツを頭に載せて運んでいる。山の中腹にある宿坊で使う水なのだが、この仕事で僅かばかりの駄賃をもらう。体の鈍った日本人なら大人でも困

難な仕事であろうが、少女たちは見事に頭上でバランスをとりながら運び上げるのである。

この象頭山の新しい（といっても2600年前からの）名を前正覚山といい、「（釈迦が）悟りを開く前に修行した山」の意である。中腹に洞窟があり、釈迦はこの洞窟に宿って厳しい修行をなされたのである。私たちが訪れた時は、その洞窟の前でお坊さんたちがちょうど説法をしているところであった。写真では中央にその入り口が写っているが、洞窟の中は六畳ほどの空間しかなく、線香の煙の中に骨と皮にやせ細った釈迦像が安置されていた。

よく誤解されている方がいるが、お釈迦様は難行苦行によって悟りを開いたわけではない。お釈迦様は、ある日、山の麓を流れるネーランジャー河で沐浴をしようとして、余りの身の軽さにもう少しで流されてしまうところであったのだが、その時、スジャータという名の村娘の民謡を歌う声が聞こえてきた。

「琵琶の弦は、強く締めれば切れてしまう。弱く締めれば音色が悪い。中ほどに締めるといい音色。琵琶に合わせて踊れや踊れ。」

お釈迦様は村娘の美しく生命力にあふれた体と、ご自分の、痩せ衰えて今にも死にそうな体を引き比べ、

「修行をすることが、この地上の生命を絶つことになるなら、それはどれほど値打ちがあるのだろう」「何の修行もしていない、何の悟りも得ていないスジャータが光り輝いて見えるのはどうしてか」と思案された。

そこで、お釈迦様はスジャータからミルク粥の供養をお受けになられ、木の実や草の根を食べての苦行という極端な道をお捨てになられた。そして、ガヤーの町に托鉢に出て布施をお受けになり、体を作り直して、ピッパラの大樹（新



チベット僧の説法



スジャータ寺のお釈迦様と  
スジャータ（左の女性）と雌牛



スジャータのミルク粥

しい名前を菩提樹という)の下で禅定にはいり、ついに大悟に至ったのである。

従って、悟りはスジャータの歌の文句にもあるように「苦楽の中道」にあり、王宮で過ごした快楽の日々の中にも、前正覚山の苦行の中にもなかったと言われているのだ。

私たち一行はスジャータの住んでいたセーナーニ村にも行ってみた。スジャータを祭る寺があり、ここでは年寄りと脚に障害のある者が物乞いをしていた。本尊のお釈迦様の左にスジャータ、右に乳を供養した雌牛がいて面白い。

ホテルに帰ってから、親しくなった料理長に「スジャータのミルク粥を作ってくれ」と注文すると、このホテルの得意料理であるとして出てきたのがこれ(写真)である。

私が幼い頃、祖父が牛乳好きで、お茶漬けの代わりに牛乳漬けをしていたのを思い出した。祖父は「栄養があるから」と私にも勧めてくれたが、これはまさにその味で懐かしかった。

2600年の昔、お釈迦様が歩き、修行された所、そして悟りを開かれた地を私は旅することができた。仏教伝来以来、日本人にとって天竺はあこがれの土地だったのであろうが、天竺まで旅した日本人は明治期まではいなかったのではないだろうか。そう思うとなんか誇らしい気もする。

一方で、お釈迦様の生きた時代とさほど変わらない日常を送っている人々の暮らしを見て、仏教国でありながら先進国の仲間いりを果たしている日本の特殊性と、すばらしさを実感した次第である。インドに教育を普及させる活動にも微力ながら応援をしてゆきたいし、またいつの日か訪問し、日本と肩を並べるほど近代化したブッタガヤを見てみたいものである。

## ごあいさつ

### 就任のごあいさつ

緩和ケア科長 小栗 啓義



この度、2012年2月1日より高知厚生病院に緩和ケア医として勤務することとなりました。前職は高知大学附属病院で産婦人科医として仕事をしていました。

「産婦人科医がなぜ緩和ケア？」と思われる方も多いかと思います。多くの方のイメージには産婦人科といえば「妊娠」「お産」という印象の方が強いのではないかと思います。実際、私もお産、帝王切開、不妊症や子宮筋腫などを手がけてきました。その中で命の誕生というものを多く経験し、命の尊さを学んできました。と同時に婦人科腫瘍医(婦人科がんを扱う医師)としてたくさんの患者さんとの出会いもありました。この婦人科がんの患者さんたちとの出会い、「縁」が今の私を緩和ケアという仕事に導いてくれたのだと思っています。

婦人科がんの患者さんたちは相対的に若く、その子供たちも幼い場合も少なくありませんでした。若かった私も懸命にがんを闘う患者さん達から多くのことを学ばせていただきました。

医療技術の発達した今、「がん」は治る病気と言われたりもしますが、やはり、治りきらず闘病の末に亡くなる方は後を絶ちません。それならいっそのこと、全ての人が必ず通るであろう死に面した局面でつらい方達の心を救いたい、最後の旅立ちをお手伝いしたいと思うようになりこの道に入りました。

まだまだ未熟ですので、日々の診療の中で、患者さん達からたくさんのことを学ばせていただいています。全ての患者さんが「心おだやかに、満足して」旅立つことができるようにお手伝いさせていただきたいと思っています。



## 緩和ケアレポート

### ● 緩和ケアレポート①

私たちがお手伝いします



左から  
緩和ケア外来看護主任 町田、  
地域医療連携室看護師 岡崎、  
医療ソーシャルワーカー 山下、  
緩和ケア病棟師長 門田、  
病棟看護師 大塚

左から  
緩和ケア科長 小栗啓義医師、  
副院長 山口龍彦医師、  
緩和ケア病棟医 北村宗生医師  
(非常勤)

患者さん一人ひとりと向き合い  
在宅から入院まで継続した緩和ケアの提供を

高知厚生病院緩和ケア科では、新しい先生をお迎えして、より充実した緩和医療の提供を行っております。昨年8月から毎週金曜日に北村宗生先生をお迎えし、今年2月からは小栗啓義先生が緩和ケア科長として就任いたしました。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。  
(医療ソーシャルワーカー 山下 梓)

### ● 緩和ケアレポート②



## たこ焼き屋『こうせい』 開店



「焼きたてのたこ焼きが  
食べたい」という患者さんの  
願いにこたえて…



「丸く焼けゆうかねえ!」「人間が丸くないと丸くならんがで!」そんな笑い声が聞こえてきたのは、緩和ケア病棟の談話室です。  
じゅうじゅうというたこ焼きの焼けるいい音とみなさんの笑い声。自然と人が集まります。  
たこ焼き屋『こうせい』の開店です!!  
これは、ある患者さんの「焼きたてのたこ焼きが食べたいな」という声を元に企画しました。  
緩和ケア病棟のボランティアさん、患者さんやご家族にも協力していただき、医師、看護師、ソーシャルワーカー、ケアワーカーみんなが一緒になってたこ焼きを楽しみました。  
焼き立ては本当に熱くて熱くて…。ハフハフ〜ッと口に頬張ります。  
美味しくておかわりしに来た方が数名。  
たこ焼き器を買いたくなった方が数名。  
談話室に出てこられた方も病室で食べてくださった方も大変満足していただけたようです。  
ささやかな企画ではありますが、そこには患者さん、ご家族、ボランティア、職員の輝く多くの笑顔があり、みんなで喜びや楽しみを分かち合えた貴重な時間となりました。

(医療ソーシャルワーカー 山下 梓)

## 院内行事

### ● 合同慰霊祭



高知厚生病院 平成23年度 合同慰霊祭を3月17日に行いました。

## 講演会のご案内

第17回 豊かないのち講演会・第11回 研究発表会

## 「命と絆と緩和ケア」

日時: 5月13日(日) 開場: 13時00分  
場所: 総合あんしんセンター3階 大会議室  
入場料: 1,000円(当日券あり)

当院にもチケットあります!!



当院は  
平成15年9月22日より  
日本医療機能評価機構  
認定病院となっております。



◆ 特定非営利法人  
日本緩和医療学  
会より認定研修  
施設として認定  
されました



◆ 厚生労働省より  
医師の卒後臨  
床研修施設の  
認定を受けまし  
た



高知厚生病院

〒781-8121 高知市葛島1丁目9-50 Tel.088-882-6205 Fax.088-883-1655  
ホームページ <http://www.kochi-koseihp.jp>